またごうとしてとちる

衣谷　創

目次

またごうとしてとちる　03
あとがき　69

またごうとしてとちる

ヨシミとお茶をしているときにとつぜん、変な人をみた、というハナシがネタになった。大学に対するグチやら、学士レベルはいいよねー、みたいな間延びした調子のひがみやらを聞き流しながら、そういうヨシミは教授を目指してるんでしょ、と反論していたところだっ　た。いつも使っている喫茶店が臨時休業していたからとファミレスにきたせいで、知らない人のうしろ頭がヨシミのむこう側にみえた。

ヨシミがいうには、その〝キチガイ〟は道ばたのじゃりとなっているところにしゃがみこんで、じっと動かないらしい。ホームレスのようなぼろぼろの服を着ているわけでもなく、むしろ高そうな、柄のない服を重ねているとのことだった。容姿だけをみればどこでもいそうな女の人だけれども、なにを考えてなにをしているのかぜんぜん分からないから、なんだか気味が悪いというハナシだった。

キチガイがいるという道はむかし小学校に通うとき使っていたなあ、とぼんやり浮かんでいるなか、ヨシミはまたハナシをつなげる。あたいへのひがみはいなくなった

ようだった。
「でさあ、ちーちゃんはそのキチガイ、みたことある？」
「うん、いやあ、そっちはふだん使わない道だし」
「それがほんとうに気味悪くてさ、なんてゆうのかな、あ、あれ、闘志を燃やした人のまわりに炎がゆらめくエフェクトなんかあるじゃん、あの炎をすごくどよーんとさせた感じがするんだよねえ」
ヨシミはあたいの目の前に手を持ってきたかと思うと、指をちろちろ動かしてきた。よどんだ炎が、ヨシミの目にはそのようにみえているのだろう。
どんな感じだよ、と言葉を投げてみた。間髪をいれずに、そんなふうにしか表現できないよー、と返してくる。
「マジで気持ち悪いんだって、毎日毎日寸分狂わずにそこでしゃがみこんでるんだよ、ロボットみたいに」
「だからってあの指のぴろぴろはないって」
「あまりにもきしょいからあまりみないもん。ちーちゃんだってみないでしょ」
「まあ、そうだろうけど」
ヨシミの考えに同意してはみたけれども、実際にはきっとみてしまうに違いなかった。あんなにヨシミから聞いてしまったら、そりゃあ興味がわかないわけがない。あ

たいは素直に、だったらやめておこう、というような性質ではない。むしろいろんなことに首をつっこんでやけどしてみるようなタイプだ。どれほど気持ち悪いのかをたしかめてみたいし、なにより、ヨシミが指のぴろぴろで表した異様な雰囲気がどんなものなのか、みてみたくなった。

ヨシミが左側のかけ時計に目を向けながら再び文句を垂れた。大学にゆく道をかえてみようかな、と髪に手櫛をかけて、でもそれだと二十分ぐらいは遅くなるわけで、と前髪をわける。朝起きるの苦手だし、と目じりに指を押しつけて外側へと引っ張る。なんかいい方法はない？　と鼻の頭をかきながらたずねてきた。

「みなきゃいい」

「それができればいいのよ、でも、怖いものみたさ、というか、まあそんなのがあって」

「それとも時間ずらせば？」

「一回試してみたんだけど、なんか一日じゅうじっとしてるらしくて」

へえ、と声を出してから、コーヒーを飲みほした。ぬるかった。温かくないカフェオレはまずい。前に口をつけたときには飲めないほどのあつさだったから、だいぶ放置しっぱなしだったみたいだ。

おかわりを持ってくることを伝えて、あたいはコップとともに席を立った。ドリン

クバーまでの道をゆっくり歩いていった。よくよくみてみると、開いているテーブルは四つか五つぐらいで、残りは主婦なり学生っぽい人なり、くわえて、制服を着た一団が占めていた。

このなかであたいたちと同じ話題をはなしている人ははたしているのだろうか、と見渡しながら想像してみた。どこの誰かも知らない人にこんな変な人知りませんか、と尋ねるなんてできない。変な人知りませんかーと訊いたあたいが変な人だ。それよりも、変な人の話題をはなしてませんか、といいでもすれば、変人認定である。

下むきの二つの口から流れ落ちているオレをながめつつも、辺りから聞こえる音を拾い集めていった。身内のグチをこぼす若々しい声が、制服の女たちが固まる方向からとんできた。父親の文句を垂れている。そのなかには逆の立場で、母親が嫌いとこぼす人もいた。別の方向からは若い男たちのバカ騒ぎが聞こえる。ドリンクバーのいろんな飲み物を混ぜて飲ませようとしているらしい。

ばからしい。

別にバカな男たちにいうわけではない。あたいらと同じことをはなしている人なんているわけがないのに捜している自分が、である。しょせんヨシミがいうその人に興味を持っている人間はあたいしかいないのだ。ヨシミはヨシミでキチガイを彼女自身の世界から排除しようとしていて、男子はいかにカオスな飲み物をつくるかで頭が

いっぱいだ。いかに親が嫌いかを訴えるばかりの制服。
ちゃいろな最後の一滴が落ちて、コーヒーが揺れた。今度はどれだけあまくするんだ、と白いカップがあたいにいらいらしているようだった。
スティックシュガー二本を手にして席につくなり、ヨシミは再びキチガイのことをたたみかけてきた。もうさ、あんなのはとっととといなくなって欲しいよ、絶対に頭のなかが春だって、と。頭がイカれていることをいいたいのだろうけれども、春には悪いとなんとなく思って、春だけは別の言葉にしたら、と髪をかきあげてみた。
あたいの言葉でヨシミはつんのめったようになって、そういえばそうだねーと外に目を向けた。
「そういや春には変質者がたくさん出るから、って思ってたけど、いつ頃からそうゆうコトバ使われはじめたんだろうねー」
さすが言語学の、今のところマスターを目指しているだけあるとは思いながらも、キチガイのハナシがもう聞けなくなったとなって、ちょっとばかりがっかりだった。あとコーヒー一滴分でもいいから、なにかしらを知りたかった。
おもむろにカップを浮かばせて、口をへりにくっつけ飲んだ。あつい。ぬるいコーヒーは嫌いだが、舌がやけそうになるコーヒーもあまり好きではなかった。
ヨシミと別れてから、試しにキチガイがいるといっていた場所へ赴いてみることに

した。小学校を出てからはまず使う機会がなくなってしまった道で、久しぶりの景色をみていると、なんだか浮ついた気分になった。道に面している材木の工場は、あたいが知っているボロ工場ではなく、きれいな四角い塊がにょきにょき生えている恰好だった。もしかしたら会社がかわっているかもしれない。道自体、はいいろっぽくなった使い物にならない舗装だったり、かといって別のところに目をやれば、タールがくろぐろしく、ごつごつした砕石をはっきりみれる新品だったりした。沿って生えている木はだいぶ老けた。

工場を横目に歩いていって、いちばんめの十字路を右に曲がってゆくと、じゃりのスペースを抱える道に出た。百メートルぐらい先に、道に沿っていたスペースが広場となっているところがある。あたいのなかでは、そこがキチガイ生息地だ。

ヨシミのハナシでは、キチガイはじゃり広場にしゃがみこんでいるとのことだったが、あたいの目では人っ子ひとりみえなかった。白っぽいじゃりと、アスファルトの上でぺちゃんこに干からびたウシガエル、それと雑木林ぐらいしかみえない。あと家も。

あたいはそれほどまで運の悪い人間だったか、と顧みてみた。小学生や中学生のころは、くじ引きで三等より下を当てたことがなかった。高校のときは文化祭の出し物で最優秀賞をとった。それよりあとはなにも、目立ったものが見当たらない。もう運

は使い果たしているようだった。
好奇心が蒸発してゆく気分だった。ほんのちょっと前まではみたくてみたくてしょうがなかったのに、もうどーでもよくなってしまっている。へんな具合に萎えてしまった。
右足だけを地面につけてくるりとふりかえった。誰も話題にしていないのは、めったにみることがないからなのだ。ヨシミがここにくるときに限ってキチガイがいて、ヨシミがいないときはいないのだ。ようは、そのキチガイはヨシミにしかみつけることができない存在である。
なんだか幽霊みたいだなーと思って、それがなかなかマトを得ている気がしたから鼻で笑ってみた。そんなところで携帯がぶるぶる震えて、電話を開いてみるとヨシミからだった。ショップのくじ引きでお気に入りのブランドの新作バッグが当たった、と盛大にきゃぴきゃぴうごめく絵文字と写メつきで送られてきた。
携帯電話の液晶越しに、ありの隊列が視界にはいった。あたいの右足が列をふさいでいる。足をどけたら、数匹のありがつぶれてごまになっていた。